

テ形接続による付帯状況の表現に見られる動詞について

—日本語と韓国語の比較から見えてくるもの—

Verbs Used According to the テ-form Conjunction Found in 'Attendant Circumstances'
Expression: A Comparative View of Japanese and Korean Language

孫 景浩*

(banny0080@hotmail.com)

This paper compares the テ-form conjunction within “attendant circumstances” expressions with its equivalent in the Korean language especially regarding transitive/intransitive verb usage with actual examples to find certain rules that explains the phenomenon.

In Japanese examples, transitive verb was used in both the [AヲBニシテ]-form and [AヲBテ]-form. On the other hand, in the Korean examples equivalent, intransitive verb was used for the [AヲBニシテ]-form and its Korean equivalent [A가 B게 되어]-form, meanwhile, transitive verb was used in the [AヲBテ]-form and its equivalent [A를 B고]-form.

In the case of [AヲBニシテ]-form and its equivalent [A가 B게 되어]-form type, the situation in the main clause will occur first, the subordinate clause will occur later in chronological order. On the other hand, for the [AヲBテ]-form and its equivalent [A를 B고]-form type, the situation in the subordinate clause and the situation in the main clause occurs simultaneously or the situation in subordinate clause occurs before the situation in the main clause.

1. はじめに

- (a) 私はのどをからからにして話した。(他)
- (b) *私はのどがからからになって話した。(自)
- (c) * 나는 목을 킁킁하게 하고 말했다. (他)
- (d) 나는 목이 킁킁하게 되어 말했다. (自)

日本語では、下線部の付帯状況の表現に他動詞を用いる。一方、同じ意味を韓国語で表す場合は他動詞ではなく、自動詞を用いる。本稿では日韓両語のテ形接続・고形接続による付帯状況の表現の中で、自他の対応を異にするものが存在する点に注目し、そこにある種の規則性が見いだせることを、具体例を挙げて述べる。

*新潟大学国際センター 平成16年度研究生 (県費留学生)

2. 付帯状況の表現の特徴

ここで言う付帯状況の表現とは、益岡隆志・田窪行則（1992）に従い、「ある動作に付随する状態や、ある動作と同時並行的に行われる付随的動作を表すもの」と規定しておく。日本語には、「テレビを見ながら、掃除をした」の「～ナガラ」、「ドアを開けたまま、外に出た」の「～タママ」のように、付帯状況を表す形式は、テ形以外にもいろいろある。

ここで、付帯状況の表現の特徴について少し触れることにする。付帯状況の定義に照らして「手を上げて道路を渡った」「窓を開けて寝た」「音楽を聴いて掃除をした」という文を見ると、下線部の「手を上げて」「窓を開けて」「音楽を聴いて」は、述語の「道路を渡る」「寝る」「友達を待つ」行為に付随する動作と言える。

この場合、付帯状況を表すテ形接続の従属節（以下、テ節）と主節の動作主体は一致しなければならないという特徴を持っている。実際、違う動作主体を用いた表現に変えると、例えば「彼が手を上げて、彼女が道路を渡った」のような単なる並列の意味になってしまうことが分かる。これはテ形接続の持つ性質として、付帯状況を表す以外に、「手段」「継起」「原因」「並列」等の意味をも表し得ることに起因している。つまり、テ形接続は、「～タママ」「～ナガラ」のような典型的な付帯状況の表現ではないため、付帯状況を表しているか否かを文脈で判断し、せいぜい「～ような場合には付帯状況を表せる」という言い方しかできない^①。

3. 考察対象となる現象

日本語では付帯状況を表すテ節に他動詞を用いるが、韓国語では他動詞を用いることもあれば、自動詞を用いる場合もある。次の例のような、日本語の「AヲBニシテ」で表される付帯状況の表現が、韓国語では「A가 B게 되어 (= A가Bニナッテ)」で表される場合がある。

	自他の区分	日本語	韓国語
8	他	私は <u>のどをからからにして</u> 話した。	*나는 목을 <u>킬킬하게 하고</u> 말했다.
	自	*私は <u>のどがからからになって</u> 話した。	나는 목이 <u>킬킬하게 되어</u> 말했다.
9	他	彼は <u>顔を真っ赤にして</u> 怒った。	그는 얼굴을 <u>새빨강게 하고</u> 화냈다.
	自	*彼は <u>顔が真っ赤になって</u> 怒った。	그는 얼굴이 <u>새빨강게 되어</u> 화냈다.

①三宅知宏（1995）は、付帯状況の表現「～ナガラ」「～タママ」「～テ」の相互間の置き換えの可能性について論じている。

10	他	彼女は <u>顔を汗だくにして庭仕事</u> をした。	*그녀는 <u>얼굴을 땀범벅으로 하고</u> 정원 일을 했다.
	自	*彼女は <u>顔が汗だくになって庭仕事</u> をした。	그녀는 <u>얼굴이 땀범벅이 되어</u> 정원일을 했다.
11	他	彼女は <u>唇を真っ青にして水の中で泳い</u> だ。	*그녀는 <u>입술을 새파랗게 하고</u> 물 속에서 헤엄쳤다.
	自	*彼女は <u>唇が真っ青になって水の中で</u> 泳いだ。	그녀는 <u>입술이 새파랗게 되어</u> 물 속에서 헤엄쳤다.

上例のように、日本語の場合「AがBニナッテ」を用いると、どれも付帯状況として成立し得なくなるが、韓国語の場合は、「AヲBニシテ」より「A가 B게 되어 (=A가Bニナッテ)」を用いた方が、かえって自然な文になる(ただし例9は「AヲBニシテ」を用いても不自然ではない)。「A를 B게 하고 (=AヲBニシテ)」を用いても付帯状況として成立しないことはないが、この場合は、他動詞性が強調されているため、下線部の行為が「わざと行う」と解釈されやすい。例1を見ると、そもそも「わざと、のどをからからにする」という行為自体が、常識的にあり得ない。日本語の場合、「AがBニナッテ」を用いれば非文になる反面、韓国語の場合は、「A가 B게 되어 (=A가Bニナッテ)」を用いた方が自然であり、「A를 B게 하고 (=AヲBニシテ)」を用いると、「わざと、のどをからからにする」という不自然な解釈を招いてしまう。

こういう現象を以下で詳しく考察する。

4. 分析

4.1 分析のための前提

本稿ではテ形接続のみを考察対象とし、「～ナガラ」、「～タママ」での接続は除外する。

- (e) 彼は顔を真っ赤にして怒った。 (=그는 얼굴을 새빨갳게 하고 화냈다.)
 (f) 彼は顔が真っ赤になったまま怒った。 (=그는 얼굴이 새빨갳게 된 채 화냈다.)

上の例の「AがBニナッタママ」の場合、「AヲBニシテ」とのニュアンスの違いは多少あるが、「～ニシテ」との置き換えに問題はない。しかしこの場合、「AヲBニシテ」が「AがBニナッタママ」に変わり、自動詞を用いた付帯状況の表現になる。

一方、日本語の「～ナガラ (同時進行)」と同じ意味を持つ韓国語の「～며」の場合は、

- (g) 그녀는 옷자락을 필력이고 뛰었다. (=彼女は裾をはためかせて走った.)
 (h) *그녀는 옷자락이 필력이며 뛰었다. (= *彼女は裾がはためきながら走った.)
 (i) *그녀는 옷자락이 필력이고 뛰었다. (= *彼女は裾がはためいて走った.)

「펼럭이다 = はためく・はためかせる」は自他両方の性質を持つ両用動詞^②であるためヲ格 (= 를格) とガ格 (= 이格) 両方とも呼応する。上の韓国語の例は、(g)のように下線部には他動詞による付帯状況の表現が用いられる方が最も自然であり、当然、対象 (옷자락 = 裾) も他動詞と呼応するヲ格 (= 를格) によって表されなければならない。(h)、(i)の場合、両方とも自然な文ではないが、実際の会話において「펼럭이다 (他)」に「~며 (= ~ナガラ)」をつけた形をとり、(g)の意味で使われることもまれにあるようである。

このように「~タママ」と「~ナガラ」は自動詞を用いても付帯状況の表現として成立する場合が生じるため、本稿では取り扱わないことにする。

4. 2 「AヲBテ」「A를 B고」

日本語では付帯状況を表すテ節に、必ず他動詞を用いる。一方、韓国語では日本語の付帯状況を表すテ節にあたるものに、他動詞を用いることが圧倒的に多いが、自動詞を用いる場合がなくはない。

まず、日本語と韓国語、ともに他動詞を用いて付帯状況を表す場合を以下に示す。

	自他の区分	日本語	韓国語
1	他	私は <u>声</u> を出して泣いた。	나는 <u>소리를 내고</u> 울었다.
	自	*私は <u>声</u> が出て泣いた。	*나는 <u>소리가 나서</u> 울었다.
2	他	彼は <u>声</u> を震わせて怒りをあらわにした。	그는 <u>목소리를 떨고</u> 분노를 드러냈다.
	自	*彼は <u>声</u> が震えて怒りをあらわにした。	*그는 <u>목소리가 떨려</u> 분노를 드러냈다.
3	他	彼は <u>体</u> を左右に揺らして歩いた。	그는 <u>몸을 좌우로 비틀거리고</u> 걸었다.
	自	*彼は <u>体</u> が左右に揺れて歩いた。	*그는 <u>몸이 좌우로 비틀거리</u> 걸었다.
4	他	彼女は <u>裾</u> をはためかせて走った。	그녀는 <u>옷자락을 펼럭거리고</u> 뛰었다.
	自	*彼女は <u>裾</u> がはためいて走った。	*그녀는 <u>옷자락이 펼럭거리</u> 뛰었다.
5	他	父は <u>ずるずる音</u> を立ててラーメンを食べた。	아버지는 후루룩 <u>소리를 내고</u> 라면을 먹었다.
	自	*父は <u>ずるずる音</u> が立ってラーメンを食べた。	*아버지는 후루룩 <u>소리가 나서</u> 라면을 먹었다.

②寺村秀夫(1982a)は第5章「動詞の自他—語彙的態の類型」で、ある共通の語根から自動詞、他動詞が派生したと見られるもののタイプの自動詞、他動詞を、それぞれ「相対自動詞」「相対他動詞」とし、形態的に対立する他動詞のない自動詞を「絶対自動詞」、形態的に対立する自動詞のない他動詞を「絶対他動詞」、自他両用に使われるものを「両用動詞」としている。

テ形接続による付帯状況の表現に見られる動詞について

6	他	少年は思い出のこもった <u>模型飛行機</u> を飛ばして涙を流した。	소년은 추억이 담긴 <u>모형비행기</u> 를 날리고 눈물을 흘렸다.
	自	*少年は思い出のこもった <u>模型飛行機</u> が飛んで涙を流した。	*소년은 추억이 담긴 <u>모형비행기</u> 가 날아 눈물을 흘렸다.
7	他	社長は深夜まで社員を働かせて実績を積んだ。	사장은 심야까지 <u>사원을 일하게 하고</u> 실적을 올렸다.
	自	*社長は深夜まで <u>社員が働いて</u> 実績を積んだ。	*사장은 심야까지 <u>사원이 일해</u> 실적을 올렸다.

上例の中で、下線部に他動詞が用いられている文は、付帯状況として成立している。本稿で最も言いたいことである、「事態の時間的順序」で言うと、上にあげた付帯状況の意味を持つ例は「従属節の動詞V1と主節の動詞V2が同時に起こる」か「従属節の動詞V1が主節の動詞V2に先行する」という意味構造を持つものである。たとえば、例1の「私は声を出して泣いた」と「나는 소리를 내고 울었다」は、「泣いた」ことによって「声が出た」とはとらえられなく、「声を出す」「泣く」の二つの動作が同時に行われていて、「従属節の動詞V1と主節の動詞V2が同時に起こる」という意味構造である。また、「声を出した」のも「泣いた」のも「私」が行った行為であり、日韓両語ともに従属節と主節が一つの動作主体で表され、付帯状況としての意味解釈が容易なものになっている。

一方、「私は声が出て泣いた」「나는 소리가 나서 울었다」のように、自動詞を用いた場合、まず使わない文になってしまい、あえて解釈するなら、「声が出たから泣いた」という「原因・理由」の意味にしかならないという点も共通している。

4.3 「AヲBニシテ」^③「A가 B계 되어」

前述した「付帯状況の表現の特徴」の繰り返しになるが、付帯状況を表す節の動作主体と主節の動作主体は同じであるため、動作主体は1回しか現れない（これはテ形接続でも同じである）。言い換えれば、付帯状況の表現として成立するためには、主節と付帯状況を表す節の動作主体が一致しなければならない、ということになる。以下に例を示す。

③Bがイ形容詞の場合は「AヲBクシテ」となるが、「AヲBニシテ」との文の中の役割に差が見られないため、代表的な形として「AヲBニシテ」と表記する。

	自他の 区分	日本語	韓国語
8	他	私は <u>のどをからからにして</u> 話した。	*나는 <u>목을 킁킁하게 하고</u> 말했다.
	自	*私は <u>のどがからからになって</u> 話した。	나는 <u>목이 킁킁하게 되어</u> 말했다.
9	他	彼は <u>顔を真っ赤にして</u> 怒った。	그는 <u>얼굴을 새빨갳게 하고</u> 화냈다.
	自	*彼は <u>顔が真っ赤になって</u> 怒った。	그는 <u>얼굴이 새빨갳게 되어</u> 화냈다.
10	他	彼女は <u>顔を汗だくにして</u> 庭仕事をした。	*그녀는 <u>얼굴을 땀범벅으로 하고</u> 정원일을 했다.
	自	*彼女は <u>顔が汗だくになって</u> 庭仕事をした。	그녀는 <u>얼굴이 땀범벅이 되어</u> 정원일을 했다.
11	他	彼女は <u>唇を真っ青にして</u> 水の中で泳いだ。	*그녀는 <u>입술을 새파랗게 하고</u> 물 속에서 헤엄쳤다.
	自	*彼女は <u>唇が真っ青になって</u> 水の中で泳いだ。	그녀는 <u>입술이 새파랗게 되어</u> 물 속에서 헤엄쳤다.
12	他	彼女は <u>目を丸くして</u> その場面を見た。	*그녀는 <u>눈을 동그랗게 하고</u> 그 장면을 봤다.
	自	*彼女は <u>目が丸くなって</u> その場面を見た。	그녀는 <u>눈이 동그랗게 되어</u> 그 장면을 봤다.
13	他	彼は <u>目を真っ赤にして</u> パソコンと格闘した。	*그는 <u>눈을 새빨갳게 하고</u> 컴퓨터와 씨름했다.
	自	*彼は <u>目が真っ赤になって</u> パソコンと格闘した。	그는 <u>눈이 새빨갳게 되어</u> 컴퓨터와 씨름했다.

上に示した日本語の例の「AヲBニシテ」を用いた文は、すべて、従属節「AヲBニシテ」と主節の動作主体が一致し、意味解釈が容易な文になっている。しかし、「AガBニナッテ」を用いた場合は、「のど」「顔」「唇」「目」等、それぞれ対応する「AヲBニシテ」文の目的語にあたるものが、動作主体としてガ格で表されている。これは文全体の中に動作主体が2つ現れることになり、その結果、付帯状況としての解釈を難しくしている。

一方、韓国語の例は、「A를 B게 하고 (=AヲBニシテ)」を用いても付帯状況の表現として成立しないことはないが、この場合、下線部が「+意図性」を帯びて、「わざとのどをからからにした状態で話す」という意味の、実際には考えられない文になってしまう。結果的に付帯状況の表現としての解釈が困難になり、並列に近い意味になる。ただし、例2だけは「A를 B게 하고」「A가 B게 되어 (=AガBニナッテ)」両方とも付帯状況として成立するが、なぜ可能なのかというところまでは本稿では言及しない。

上にあげた日本語と韓国語の例の付帯状況として成立する文は、すべて「主要な事態(主節/動詞V2)の結果、付随する事態(テ節/動詞V1)が起こる」という意味構造を持つ。たとえば、8では、話したことで「のどがからからになる」という変化が、9では、怒った

ことで「顔が赤くなる」という変化が、10では、庭仕事をしたことで「顔が汗だくになる」という変化が起こるのである。V1、V2の二つの動作によって表現される動作の起こる順番が、厳密に決まっており、逆になることはない。つまり、日本語で「主要な事態の結果として付随する事態が起こる」という意味構造を持つ「AヲBニシテ」型の付帯状況の表現は、韓国語では自動詞を用いた「A가 B게 되어」という型の付帯状況の表現で用いられる、と言える。

5. まとめ

これまでの考察を以下に簡単な表でまとめる。

	日本語	韓国語	日本語	韓国語
事態の順序	V2 > V1		V1 ≥ V2	
自他の区分	他動詞	自動詞	他動詞	他動詞
	「AヲBニシテ」	「A가 B게 되어」	「AヲBテ」	「A를 B고」
	A：動作主体の身体の一部を表すもの ／B：形容詞		A：動作主体の身体の一部を表すもの、あるいは所有物 ／B：他動詞	

- ① 本稿で挙げた例は、日韓両語ともに、主要な事態（V2、主節）とそれに付随する事態（V1、テ節）からなっているものである。付随する事態というのは、付帯状況の表現を指す。
- ② そのうち、日本語の「AヲBニシテ」と、それに対応する韓国語の「A가 B게 되어 = A가Bニナッテ）」は、主節の表す事態の結果としての変化である。
- ③ この場合、日本語では、従属節と主節の表すそれぞれのできごとを一つの事態として認識するのに対し、韓国語では、二つを別々の事態として認識する傾向がある、と考えられる。

6. 終わりに

これまで日韓両語の付帯状況の表現に見られる動詞の自他の対応について見てきた。しかし、韓国語の例9がどうして他動詞でも自動詞でも可能なのか、その理由を探ることまでには至らなかった。今の段階でははっきりとした裏づけになるほどの説明はできないが、実際の会話において「그는 얼굴을 새빨갈게 하고 화냈다」だけが、他の韓国語例の自動詞を用いた表現同様に多く使われているためではないかと考えられる。

今回はテ形接続に限定し、その下位分類の「～ニシテ」を「～게 되어」に、「～ニシテ」以外の「～テ」を「～게 하고」に対応させて観察したが、はたして日本語の「テ」と韓国

語の「ユ」がびったり対応するかどうかということについて、もっと調べなくてはならない。この点をしっかりおさえた上で、今後「～ナガラ」や「～タママ」、さらに「～ナイデ」「～ズニ」等の否定形をも取り入れて考えていきたい。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたって、草稿段階での発表の機会を与えてくださった新潟大学言語研究会の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 庵功雄他（2003）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫（1982 a）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫（1982 b）「付帯状況表現の成立の条件—「XヲYニ……スル」という文型をめぐって—」『日本語学10-2』
- 日本語教育学会（1982）『日本語教育辞典』大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 三宅知宏（1995）「～ナガラと～タママと～テ—付帯状況の表現—」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』
- 森山卓郎（1986）「日本語アスペクトの時定項分析」『日本語研究（一）現代編』明治書院